淡蘭 TAMSUI-KAVALAN TRAILS

國家級步道

淡蘭平原線

導覽地図

|日本語|

宜蘭縣政府

2025.12

廣告

行前導読...

淡蘭とは？

「淡蘭」とは、清代台湾北部の淡水廳から東部の噶瑪蘭廳へ至る交通路で、新北市の瑞芳・双溪・貢寮・汐止・平溪・石碇・坪林および宜蘭県頭城を経由し、歴史・文化・産業・生態多様性を結び付ける、深い文化的意義を有する路線である。かつては計画の不足により、古道の多くが荒草に覆われていたが、近年は政府と民間が協力し、手作業の工法で修復を行い、2018年に「北路」「中路」「南路」の三大路網として統合され、古道の風華が再現された。

淡蘭国家級緑道 北・中・南路

淡蘭北路：

北路は発展が最も早く、史料の記載が最も多い区間で、当時の官道であった。北路は歴史の脈絡に沿って、「煤光寮古径」「楊廷理古径」および「入蘭正道－金字碑古道→（双溪経由）→遠望坑親水公園→草嶺古道→大里火車駅」の三大古径として整理されている。

淡蘭中路：

中路は生活民道であり、公式の歴史記録は比較的少なく、現存する史料の記載から探究し、淡蘭中路の路線は、暖東峡谷歩道→暖東旧道→五分山歩道→番仔坑歩道→灣潭古道→烏山越嶺古道→坪溪古道→石空古道→外澳火車駅として構築されている。

淡蘭南路：

南路は清朝時代における重要な経済の茶路である。現在の南路は「淡蘭便道」とも呼ばれ、万華→六張犁から深坑→石碇を経て坪林→石牌へ至り、宜蘭の礁溪または頭城へ通じ、現存する外按古道と跑馬古道を含んでいる。

淡蘭サービス拠点

外澳游客センター
頭城駅
礁溪駅
宜蘭観光サービスセン

游客サービスセンター

外澳游客センター
蘭博烏石港驛站
二城驛站游客センター
宜蘭観光サービスセン

路線の総延長は約22.5kmです
徒　歩　時　間　約5H 10M
自転車の乗車時間約 1H 30M

淡蘭国家級歩道テーマウェブサイト

宜蘭県政府グローバル情報ネットワーク

宜蘭ファンFacebookファンページ

淡蘭平原線に出会う

淡蘭国家級グリーンウェイは、清朝期の淡水庁と噶瑪蘭庁を結び、先住民族の狩猟、移墾、通商の歴史を担ってきた。近年、修復と統合が進められ、北路・中路・南路の三路に整備され、そのうち中路は坪林、石碇、平渓から頭城へと延びる中核路線である。淡蘭平原線は中路の終盤と接続し、古道を宜蘭平原へと延ばし、旅人が山道から平原へと進み、歴史の脈絡を体験できるようにしている。本路線は宜蘭の拓墾史を回顧し、タイヤル族、噶瑪蘭族、オランダ・スペインの植民、呉沙の入蘭、清朝の設庁を含み、文献と集落に基づいて再計画され、徒歩や自転車に適した文化探索ルートとして整備されている。路線は外澳駅から宜蘭観光サービスセンターまでで、沿線にはスタンプ設置地点があり、また外澳、頭城、礁溪、宜蘭にサービス拠点を設け、情報と支援を提供し、楽しさと利便性を高めている。

① 外澳駅

頭城に位置する無人の小駅で、駅を出て濱海公路を渡ると広大な太平洋が広がり、亀山島を遠望することができる。

② 外澳接天宮

1973年に建てられ、戦後、山上の住民が生計を立てるため外澳里へ移住したことから、擲筊で請示して接天廟を移建し、外澳の武当山へ遷した。

③ 烏石港

宜蘭県頭城鎮に位置し、港内にある巨大な黒色の礁石に由来して名付けられた。かつては清朝時代の蘭陽第一の港であったが、後に淤積により衰退し、現在は観光漁港として再建されている。

④ 蘭陽博物館

「宜蘭」を主題とする県立総合博物館で、頭城鎮烏石港旧址に位置し、「宜蘭の窓を開く」ことをもって宜蘭の自然生態と人文歴史を展示している。

⑤ 十三行街屋

頭囲港に近い十三行街屋は清朝時代の貿易行郊で、もとは十三軒の街屋が連結して形成されたものである。

⑥ 頭城老街

頭囲街とも呼ばれ、現在の和平街であり、河川運輸の発展により繁栄し、清朝時代には蘭陽平原の経済中心であった。

⑦ 頭城慶元宮

当地で最も早い媽祖廟は頭城老街に位置し、1796年（嘉慶元年）に建てられ、これが廟名「慶元」の由来である。

⑧ 盧纘祥旧宅

盧纘祥旧宅は1928年（昭和3年）に建てられ、宅地は広く、和風の屋根に洋風のドーマーがあり、壁は洗石子で白煉瓦を装飾し、建築は壮麗である。

⑨ 故居前池塘

調査研究の推論によれば、盧纘祥故居前の池塘はかつて頭囲港の内港であり、1928年に盧宅を改建した際、この遺跡を利用して「舟遊式」の庭園として整備され、人々の休憩と遊憩に供された。

⑩ 頭囲港遺址

1883年（光緒9年）、烏石港は沈船により塞がれ、河水が流路を変え、頭囲港が興起して北台湾の重要港となり、老街は繁盛した。1924年（大正13年）8月5日・6日に山洪が発生して埋没し、老街もこれに伴い衰退した。

⑪ 順天府 池府王爺廟

1830年（道光10年）に庄民によって建立され、主祭神は池府王爺であり、宜蘭では数少ない五府王爺廟である。

⑫ 林朝宗旧宅

林朝宗は林本源租館の要員であり、古厝は1925年（大正14年）に建てられた、伝統的な閩南式三合院の埤屋で、外壁には和風の磁磚が敷かれている。

⑬ 四十甲濕地

静かな水面に山の景色が映り、広大な湿地には多くの鳥類が集まり、渡り鳥や冬鳥の休息地となっている。中央には一キロにわたって連なる小葉欖仁の緑のトンネルがある。

⑭ 下埔福聖廟

824年（道光4年）に建立され、福徳正神を祀り、1895年（光緒21年）に戦火で焼失し、1903年（明治36年）に修建された。廟は小さいが参拝客が多く、下埔住民の信仰の中心である。

⑮ 湯圍溝温泉公園

「燒水溝」とも呼ばれる湯圍温泉溝で、礁溪温泉分布の中心である。自然に湧き出た泉水が集まって流れを成し、湯気が立ち上るため、温度が比較的高い。

⑯ 跑馬古道公園

前身は「明德管訓班」である「跑馬古道公園」は、改造によって空間を解放し、危険な建物を撤去し、示意的な空間を残し、南北の広場はそれぞれ特色を備えている。

⑰ 德陽宮

主祭神は中壇元帥（太子爺）であり、嘉慶年間（1796年–1820年）に福建漳州の先民が奉迎して台湾へ迎え、1807年（嘉慶12年）に廟を建立し、地域の信仰中心となった。

⑱ 礁溪協天廟

1804年（嘉慶9年）に建立され、主祭神は関聖帝君であり、台湾で唯一の「蠶絲関公」で、協天廟の最大の特色である。

⑲ 呉沙旧宅

1798年（嘉慶3年）、呉沙は漳・泉・粤の三籍漢人を率いて烏石港から蘭陽を開墾し、「開蘭第一人」と尊称された。故居は1902年に建てられ、北を背に南を向いた煉瓦造りの三合院である。

⑳ 土角煉瓦壁

呉沙故居には土角煉瓦の壁が残されており、粘土と稲草で煉瓦を作り、一塊は約3キログラムである。建築は約三段の台基の上に建てられ、石で築いた台基によって土角煉瓦壁を高くしている。

㉑ 武暖石橋頭福德廟

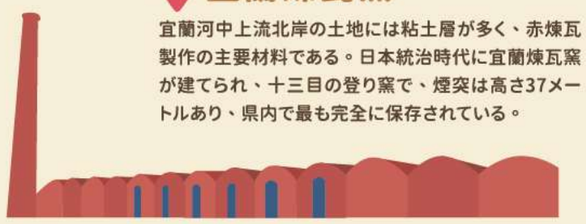
主祭神は福徳正神であり、最初に祀られていた開基土地公は、呉沙が入蘭の際に台湾へ持ち来た神尊と伝えられるが、現在は廟内にない。

㉒ 武暖石板橋

1891年（光緒17年）に建てられ、清代における礁溪から宜蘭へ通じる官道であり、当初は大陸から運ばれた六枚のバラスト石を用いて架けられた武暖石板橋である。

㉓ 宜蘭煉瓦窯

宜蘭河中上流北岸の土地には粘土層が多く、赤煉瓦製作の主要材料である。日本統治時代に宜蘭煉瓦窯が建てられ、十三目の登り窯で、煙突は高さ37メートルあり、県内で最も完全に保存されている。



㉔ 楊士芳紀念林園

宜蘭初の進士である楊士芳を記念して設けられた楊士芳紀念林園は、県政府が計画した宜蘭河沿いの「維管束計画」における最初の起点である。宜蘭旧城の生活回廊はここから始まり、曲がりくねった素朴な小径を通って宜蘭県社会福祉館へ至り、さらに西堤屋橋へと連なり、津梅桟道へ接続する。その様子は一条の流水のように、宜蘭の故郷の川——宜蘭河へと注いでいく。

㉕ 宜蘭市城隍廟

1813年（嘉慶18年）に官民の協力によって建立された宜蘭唯一の清朝官祀の城隍廟で、城隍爺を主神として祀る。もとは土角層の建築であったが、1927年（昭和2年）に老朽化により倒壊し、その後、煉瓦造で再建された。

㉖ 宜蘭昭應宮

1808年（嘉慶13年）に建立され、県定古跡であり、主祭神は媽祖である。1810年（嘉慶15年）、皇帝の勅命により修繕が行われ、香炉を下賜されて昭應宮は官祀を代表する廟となった。1812年（嘉慶17年）、噶瑪蘭庁の設置後、昭應宮は交通の要衝に位置していたため、官府が諭旨や告示を掲示する場所となり、住民の生活と信仰の中心でもあった。

㉗ 宜蘭観光酒廠

現在の甲子蘭酒文物館であり、1909年に創立された「宜蘭製酒公司」から転型したものである。台湾で最も歴史の古い酒廠の一つで、紅露酒の生産で知られている。

㉘ 宜蘭美術館

元「台湾銀行宜蘭支店」の旧舎を改築し、2015年に正式開館した県立美術館で、地域の芸術文化の発展推進と美術資産の保存に尽力している。

㉙ 幾米広場

宜蘭火車駅南側に位置し、台湾で初めて作家・幾米の作品をテーマとした広場である。旧宿舎を改築し、絵本の場景を取り入れ、童話の雰囲気が来訪者を引き付けている。

記念スタンプの設置場所

外澳游客センター

頭城駅

礁溪駅

宜蘭観光サービスセンター